

檜隈寺周辺の調査

—第164次

1 はじめに

本調査は、キトラ古墳周辺に計画された国営飛鳥歴史公園の整備にともなう発掘調査である。調査は国土交通省の委託を受け、2008年度から実施しているもので、今年度はその3ヵ年目にあたる。今回の調査では、これまでの試掘および発掘調査の成果をもとに、檜隈寺講堂北側の丘陵頂部から西側斜面にかけて2ヵ所の調査区を設定した。さらに丘陵東裾部でも、国営飛鳥歴史公園と民地との境界線を示す擁壁設置のために5ヵ所の試掘区を設け、試掘調査を実施した。発掘調査期間は、2010年8月24日～12月27日、調査総面積は約655㎡である。

調査区一帯は、古代から檜前と呼ばれ、渡来系氏族が多く居住した地域として知られている。そのなかで檜隈寺は、渡来系氏族である東漢氏の氏寺とされ、高取山か

ら北西方向に派生する丘陵頂部に立地する。現在、檜隈寺は、阿知使主を祭神とする於美阿志神社の境内地となっており、その塔跡には平安時代の十三重石塔が建つ。

檜隈寺に関しては、奈文研がおこなった檜隈寺第1～4次調査で、金堂、講堂、西門、回廊といった主要堂塔を確認しており、伽藍主軸が北で23°～24°西に振れることや、西を正面にすることなど、地形に制約された特異な伽藍配置をとることが判明している（『藤原概報 10～13』）。これらの建物の造営時期は出土遺物から、金堂・西門が7世紀後半、それにやや後れて講堂・塔が7世紀末とされている。

その後、国営歴史公園の整備を契機に、2008年から奈文研、奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）、明日香村教育委員会（以下、明日香村教委）が分担して調査を実施しており、丘陵全体が寺域として利用されていた実態があきらかとなった（『紀要 2009・2010』、橿考研『奈良県遺跡概報 2008年』2009、『奈良県遺跡概報 2009年』2010、明日香村教委『明日香村調査概報 平成20年度』2010）。また、檜隈寺周辺では7世紀前半の瓦が出土することから、前身寺院の存在が想定されてきたが、第159次調査第6区では、竪穴建物SB910（『紀要 2010』）のように、7世紀前半から中頃に遡る遺構も確認されている。さらにSB910からは、L字形カマドが検出されており、檜前の地にふさわしい渡来系要素の強い遺構も検出されている。

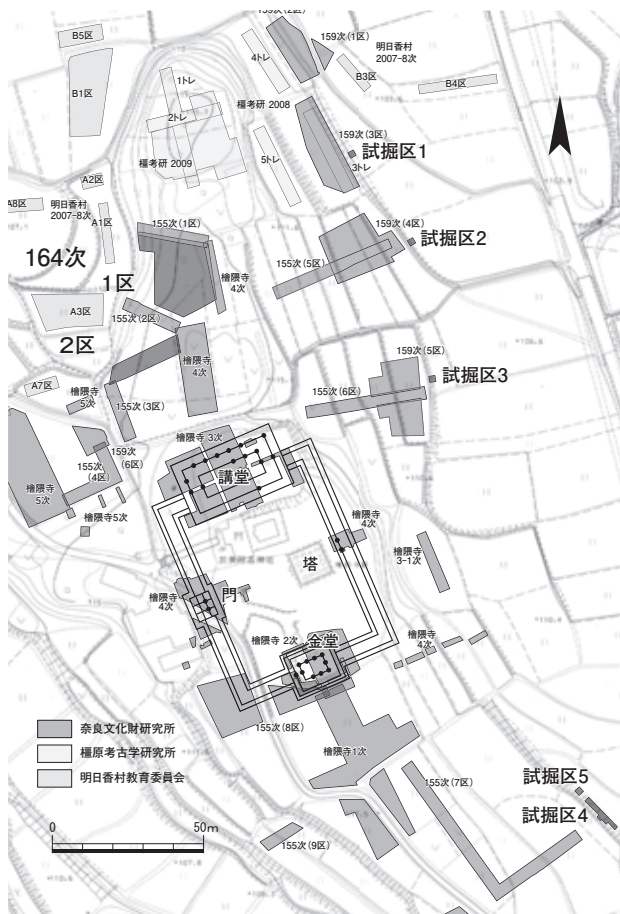


図160 第164次調査区位置図 1:2500



図161 第1区全景（北から）

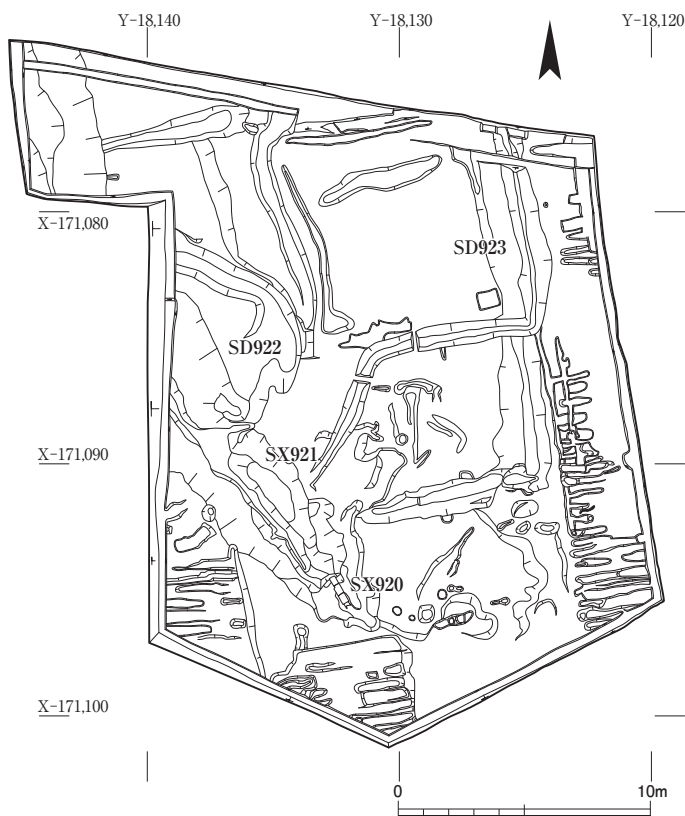


図162 第1区遺構図 1:300

2 各調査区の概要

第1区

檜隈寺講堂の北約60mに位置し、丘陵頂部の平坦面から西側の斜面地にかけて調査区を設定した。調査区は、第155次調査第1区の南辺および檜隈寺4次調査区西辺と一部重複する。調査面積は約500㎡である。

基本層序は上から①表土（10～30cm）、②耕作土（40～110cm）、③灰褐色砂質土（5～15cm：中世以降の包含層）、④赤褐色粘質土（20～70cm：10世紀後半から11世紀前半の整地土）、地山の順である。

調査区は講堂の真北にあたり、本来なら僧房など、伽藍の主要建物を想定できる位置にある。しかし、丘陵頂部の平坦面にあたる調査区東半部では、建物に関連する遺構は確認できず、②層の下で地山を確認した。調査区東半部の標高は、講堂基壇の高さと比べると2m以上も低い位置にあることから、後世に大規模な削平がおこなわれたものと考えられる。いっぽう、丘陵の西側斜面部では、③層の下で大規模な整地層（④層）を確認した。④層は、斜面部全体に広がっており、10世紀後半から11世紀前半の遺物を含む。

溝SD923 鍵の手状に屈曲する素掘溝。東半部は地山直上、西半部は③層の上面で確認した。溝の幅は残存状態

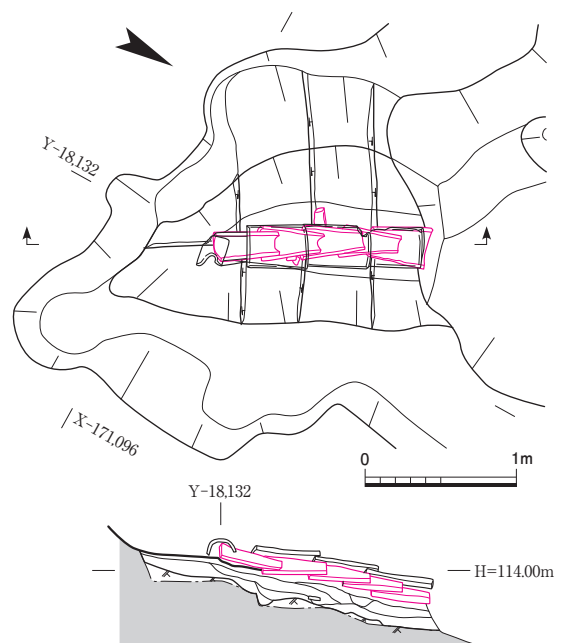


図163 瓦組暗渠SX920平面図・断面図 1:50



図164 瓦組暗渠SX920検出状況（北東から）

の良い北壁付近で1.1～1.4m、深さは0.9m。溝の断面はV字状をなす。SD923北半部では、西側に幅1～1.3m、深さ10cmのテラス状の平坦面をもつ。SD923西半部は深さが15～30cm程度と浅いことから、溝上面は削平されたと考えられる。埋土からは17世紀の陶磁器が出土している。

溝SD922 緩やかな円弧を描く素掘溝。地山面で検出した。SD922は次に述べる谷SX921から派生していると考えられる。幅1.3～2.4m、深さ40cm。埋土には7世紀から11世紀の土器・瓦が含まれる。

谷SX921 北西方向に入り込む小さな谷。地山面で検出した。幅は西壁付近で4.2m、深さは最深部で0.9m。谷頭部には瓦組暗渠SX920が設置されていた。埋土には7世紀後半から10世紀後半の土器や瓦が含まれる。

瓦組暗渠SX920 丸瓦と平瓦を転用し、組み合わせた

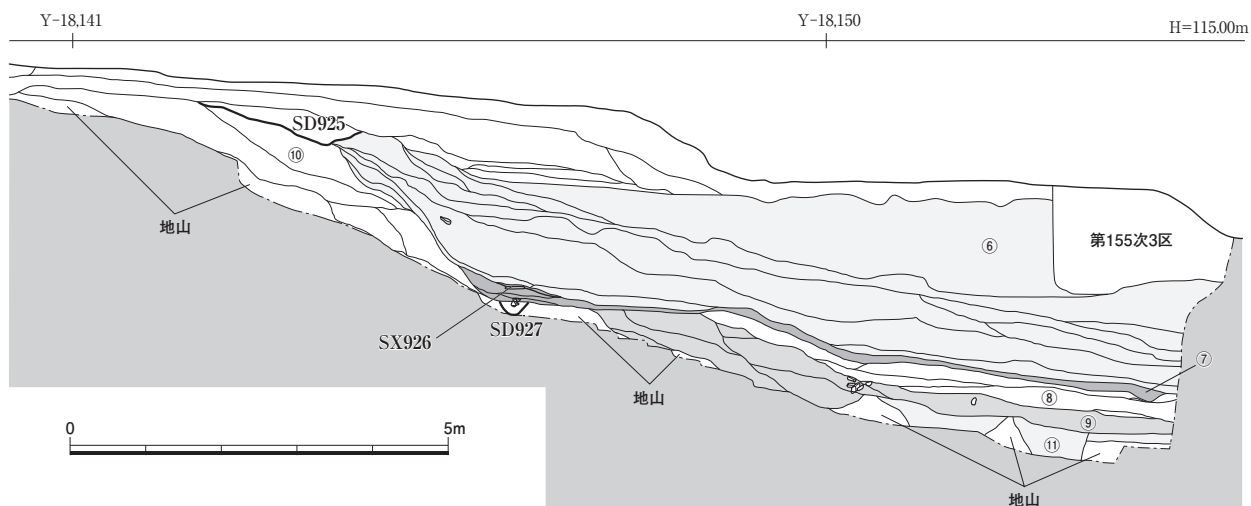


図165 第2区南壁土層図 1:100

暗渠（図163・164）。先端部分のみが約1.4m残存する。SX921の谷頭部分に設置されており、谷底に向けて排水していたと考えられる。瓦組暗渠は、排水口から順に瓦を並べて造られている。底には丸瓦を狭端が下方になるように敷き、上には平瓦を蓋として広端を下方に向けてかぶせる。ただし先端部だけは、上・下ともに平瓦をもちい、平瓦狭端が排水口となるように組み合わせてあった。また、SX920を据付ける際には、丸瓦の下に瓦片を置いて、水が流れる角度を調節していた。

SX920に用いられた瓦は縦縄叩きをもつことと、行基式丸瓦であることから、7世紀後半から末に造営された檜隈寺創建瓦を転用したと思われる。いっぽう、据付掘

方からは10世紀の土師器皿と思われる小片が1点出土しており、暗渠に用いられた瓦の年代と合致しない。さらに、SX920の排水に利用されていた谷SX921埋土から出土する土器も10世紀後半が主体となる。このことから、SX920は檜隈寺創建時の建物にはともなわず、後世に檜隈寺所用の瓦を転用して瓦組暗渠が造られた可能性が高いと考えられる。

第2区

調査区は、第1区の西南部に位置し、調査区南西隅の一部が第155次調査第3区と重複する。調査面積は140㎡である。

基本層序は、東側の丘陵上頂部付近と西側の斜面部付近とは大きく異なる。調査区東側は、第1区と同じく後世の削平が著しく、①表土（5～15cm）、②旧耕作土（40～70cm）、地山の順となる。いっぽう、調査区西側は、谷地形を埋め立てる大規模な整地を断続的におこなっており、①、②を掘り下げると、③暗茶色粘質土（10世紀後半：20～70cm）、④茶灰色砂質土（奈良時代後期：30～70cm）、⑤褐色砂質土（奈良時代前期：10～30cm）、⑥茶褐色砂質土（藤原宮期：30～240cm）、⑦青灰色粘質土（7世紀後半：

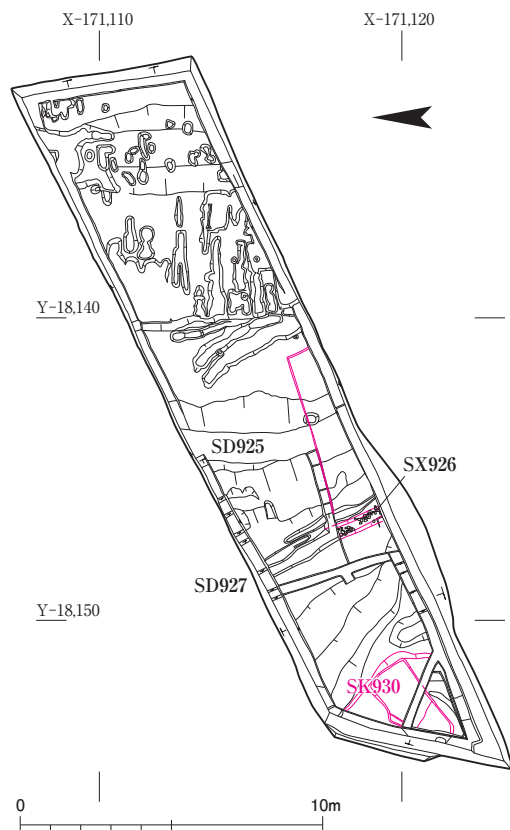


図166 第2区遺構図 1:250



図167 第2区全景（北西から）

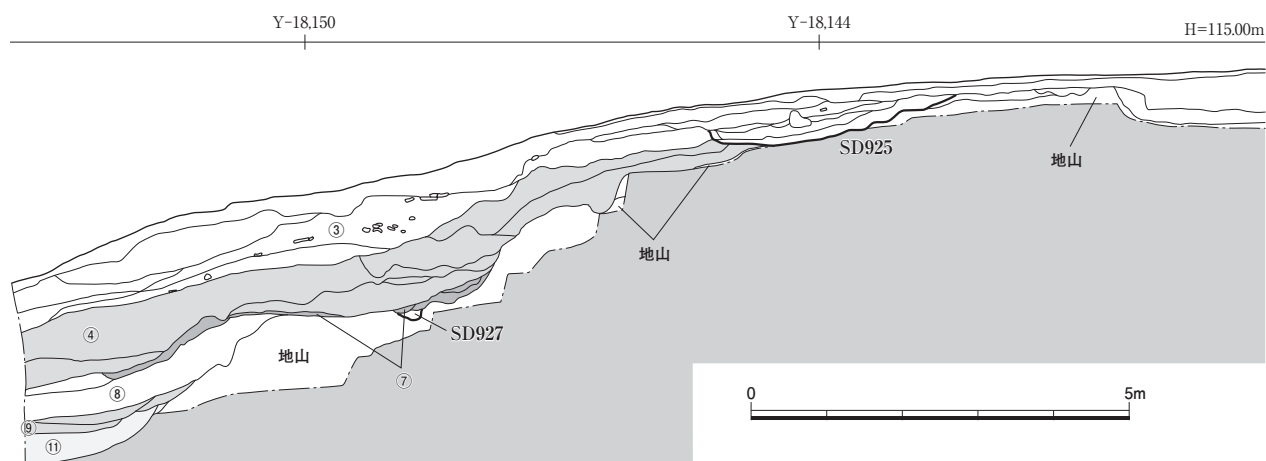


図168 第2区北壁土層図 1:100

20～50cm)、⑧灰色砂質土(7世紀後半:10～60cm)、⑨緑灰色砂質土(7世紀後半:10～30cm)、⑩赤灰褐色砂質土(10～50cm)、⑪青灰色粘土(7世紀前半:20～50cm)、地山の順となる。

土層は、①～⑥層までは南東から北西に向かって斜め方向に堆積しているため、南壁と北壁とでは堆積状況が全く異なる(図165・168)。③層は10世紀後半の整地土である。大型の瓦片を大量に含んでいる。④層では、西壁付近で奈良時代後期の土師皿・碗が折り重なった状態で大量に出土した。⑤層は、北壁・南壁では確認できないが、斜面部中央付近で確認された整地土である。奈良時代前期の土器が出土している。⑥層は地山由来の均質な土が厚く堆積し、遺物の量は極端に減少する。南壁と北壁とで土層がほぼ対応してくるのは⑦層からで、南北溝SD927を境に西側では斜面も緩やかになる。斜面裾部に沿ってめぐらされたSD927の存在からも、SD927周辺は地山を削り地形を改変したと考えられる。⑧・⑨層は、粘土層と砂層とが交互に入る水性堆積層の特徴をしめす。このことから、一時期沼状の地形を形成していた可能性がある。また⑨層上面からは、腐食した杭の痕跡を多数確認した。⑩層は、南壁付近の斜面部のみ確認できる層で、南へ向かって大きく落ち込んでいる。南西へ延

びる谷を埋める整地土と考えられる。⑪層は、最下層の整地土である。7世紀前半の遺物を含む。

南北溝SD925 調査区中央部の平坦部を南北に流れる素掘溝である。幅2m、深さ30cm。③層の上面で検出した。埋土からは7世紀前半から9世紀前半までの土器や瓦が含まれる。

瓦敷SX926 瓦を南北に細長く敷いた遺構である。斜面裾部の⑤層直上で検出した。幅30～40cm。南壁際から約1.6m分検出した。瓦は凸面に縦縄叩きがある。7世紀後半から末にかけての檜隈寺創建瓦と考えられる。

南北溝SD927 斜面裾に沿って設置された幅の狭い素掘溝。地山面で検出した。斜面から流れてくる水を排水するための溝と考えられる。瓦敷SX926の直下で検出したものの、SX926との間には⑦層を挟むため、SD927とSX926との関連性は不明である。幅40cm、深さ15cm。溝埋土は焼土を含む粗砂で、そこから漆壺片や鉄滓などが出土している。

土坑SK930 長方形を呈する土坑(図169・170)。地山面で検出した。SK930の南西隅は西壁にかかっている。大きさは、短辺1.5m、長辺3.2m、深さ0.8m。埋土からは、7世紀前半の土器や、完形の檜隈寺軒丸瓦Ⅰ型式Aを検出した。(石田由紀子)



図169 SK930検出状況(北から)

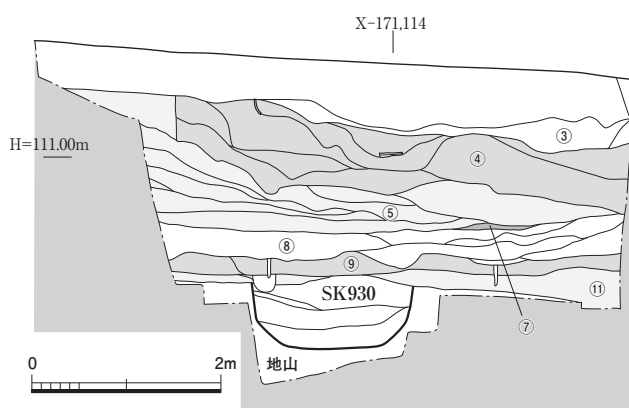


図170 第2区西壁およびSK930土層図 1:80

試掘調査区

擁壁工事に関わる試掘調査は、第155・159次調査区（『紀要 2009・2010』）の東縁斜面において、既に発見されている建物の側柱筋や塀の延長線上、およびトレンチの延長線上に5ヵ所の調査区を設け、実施した。北から順に試掘区1・2・3・5・4と呼称する。試掘区1～3・5では遺構の検出はなかったが、最も南側に設定した試掘区4にて石敷遺構を検出した。以下ではこの試掘区4の成果について述べる。

試掘区4は、主要伽藍東南部に位置する丘陵東斜面において、第155次調査第7区東端を東北東に延長した位置に設定した（図160）。調査面積は約10㎡である。斜面地であるため基本層序の説明が難しいが、土層の厚い調査区西南壁奥部（斜面上部）の層序では、上から①表土（5～20cm）、②造成土（110～120cm）、③褐色粘質土（中世以降の遺物包含層：5～15cm）、④マンガン濃集層（3～5cm）、⑤橙色粘質土（遺物包含層：5～10cm）、地山となる。②層より下位の各層は調査区内では北東方向に緩く傾斜しつつも概ね水平に堆積するが、②層は斜面上部で土層の大部分を占め、下部で無くなる。この②層が斜面を構成する土層の大部分を占める。おそらく棚田造成時に丘陵

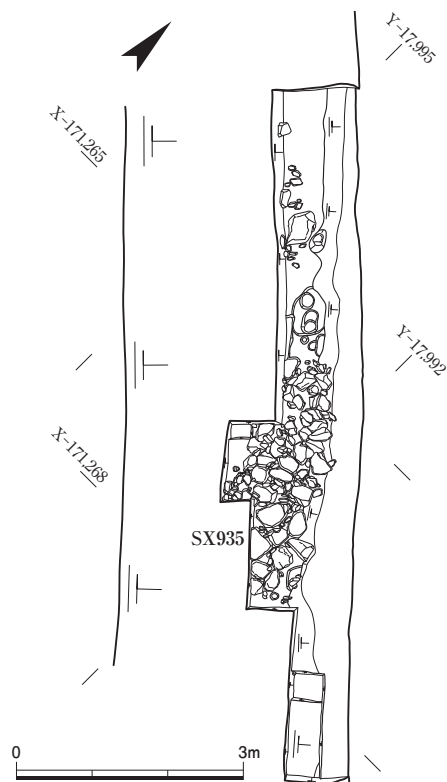


図171 試掘区4遺構図 1:100

頂部を削平した際のものであろう。

石敷SX935 ⑤層を掘り下げた地山面で、石敷と考えられる遺構を検出した（図171）。地山を浅く掘りくぼめて敷設されている。石敷は南側では上面が平坦に揃い、目地も詰まっているが、北側では配列が乱れている。また、確認された石敷のさらに北側には浅い掘り込みがあり、これが石の抜取痕とすれば石敷が本来この部分まで続いていた可能性もある。他方、調査区西南奥部には石敷のない箇所があり、これが石敷の縁とすれば石敷西縁は北北西方向に延びていたことになり、檜隈寺の伽藍主軸の振れ（北で23°～24°西）との関係からみて興味深い。なお、東縁は水田により破壊されている。

⑤層出土の土師器・須恵器片は8世紀前半まで、石敷の直上・直下から出土した土師器片は6世紀末から7世紀までの時期幅に収まる。調査範囲が狭く確言できないが、石敷の時期を知る手がかりとなる。付近の類例としては、檜隈寺より約1.5km南に位置する明日香村・高取町ホラント遺跡の石敷遺構群が挙げられるが（榎考研『ホラント遺跡』2005）、こちらもその性格はいまだ不明な点が多い。（森先一貴）

3 出土遺物

瓦磚類 第164次調査区からは、丸瓦2,618点（376.1kg）、平瓦9,329点（752.6kg）、軒丸瓦4型式7種25点、軒平瓦3型式4種13点、垂木先瓦1点、尾垂木先瓦1点、面戸瓦1点、熨斗瓦4点、文字瓦3点、ヘラ描き平瓦3点、ヘラ描き丸瓦4点が出土した。

各調査区から出土した軒瓦の型式および出土点数は表18の通りである。型式名に関してはローマ数字による檜



図172 石敷SX935検出状況（北から）

隈寺の型式名を使用する（花谷浩「京内廿四寺について」『研究論集Ⅺ』奈文研、2000）。以下、軒瓦を中心に今回の調査で出土した主要な瓦について報告する（図174）。

1は、軒丸瓦Ⅰ型式A。素縁八弁蓮華文軒丸瓦で、弁に複子葉と火焰文を加える。丸瓦の取り付け位置は高く、瓦当裏面の丸瓦先端部が当たる部分には、藁を環状に束ねた道具の圧痕が反転して残る。この道具は、藁を束ね、所々を縛りながら環状に作ったもので、丸瓦を乾燥させる際に瓦の下に敷いて用いられたと考えられる。瓦当裏面はユビナデの痕が明瞭に残る。色調は灰色で焼成は良好。第2区SK930から出土した。2は軒丸瓦Ⅱ型式C。法隆寺軒丸瓦39Bと同範。全体に摩滅が著しく、調整等は不明だが、範の被りの痕跡が明瞭に残る。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を大量に含む。色調は灰色。第2区表土出土。3は軒丸瓦Ⅲ型式A（6275G）。丸瓦の取り付け位置は高く、丸瓦先端は未加工。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を多く含む。色調は外面黒色、内面灰色。第2区④層出土。4は、軒丸瓦Ⅲ型式B。丸瓦先端は未加工である。焼成は硬質で、色調は明褐色。藤原宮所用瓦6275Nと同範だが、胎土・焼成が全く異なる。第2区表土出土。5は軒丸瓦Ⅳ型式C。平城宮瓦編年でⅣ－1期とされる平城宮所用瓦6133Oと同範（『平城報告Ⅻ』）。丸瓦の取り付け位置は低く、丸瓦先端は未加工。焼成はやや軟質で、色調は外面黒色、内面灰色。第1区③層より出土した。6～8は、金堂所用瓦とされる三重弧文軒平瓦Ⅱ型式。6は軒平瓦Ⅱ型式A。型挽きによる三重弧文軒平瓦で、弧線がやや扁平で幅広い。凹面には布端のある布目痕が確認できる。凸面は顎部まで縄叩きを施した後、丁寧にナデ調整をする。焼成は硬質で色調は灰黄色。



図173 第164次調査出土「吳」字がある文字瓦

第2区⑧層から出土した。7は第1弧線の幅が狭い軒平瓦Ⅱ型式B。顎部の段差は軒平瓦Ⅱ型式AやCに比べて浅く、5mm程度である。凹面には布目痕が明瞭に残るいっぽう、凸面は顎部まで縄叩きした後、丁寧にナデ調整をおこなう。焼成は硬質で、胎土には大量の砂粒を含む。色調は灰色。第2区SD925下層より出土。8は軒平瓦Ⅱ型式C。Ⅱ型式Aよりも弧線の幅が狭く、凹線の幅が広い。全体に摩滅が著しいものの、顎部には縦縄叩きの痕跡が明瞭に残る。焼成は軟質で、色調は外面灰色、内面は淡黄色。第2区④層より出土。9・10は軒平瓦Ⅲ型式A（6641L）。檜隈寺講堂所用瓦とされる。Ⅲ型式Aの顎部は、段顎と直線顎とがあり、9は側縁に近い破面で段顎とおぼしき痕跡が残る。凸面は横方向のナデで縄叩きをすり消し、凹面は縦方向のナデで布目痕を粗く消した後、瓦当部付近を横方向に削る。焼成は良好で、胎土には砂粒を多く含む。色調は青灰色。第1区谷SX921より出土。10は直線顎。凹面には布目痕が明瞭に残り、凸面は丁寧にナデ調整する。焼成はやや軟質で、灰白色。SD920下層出土。11は複弁八弁蓮華文の垂木先瓦B。焼成はやや軟質で、胎土に砂粒を多く含む。色調は赤褐色。第2区表土出土。12は尾垂木先瓦片。側縁部はすべて欠損し、中房と蓮弁の一部が残存する。焼成は軟質で、色調はにぶい黄橙色。第2区③層出土。

また、第2区では③層で丸瓦凸面に「吳」と書かれた文字瓦が3点出土した（図173）。文字はすべて玉縁に近い丸瓦部に書かれており、縄叩きをすり消して平らな面を作り、そこに文字を書いている。「吳」の文字が書かれた瓦はこれまでも、表面採集や明日香村教育委員会による2008－3次調査A－3区で確認されており、丸瓦

表18 第164次調査出土軒瓦集計

種類	型式	1区	2区	出土遺構・層位※
軒丸瓦	ⅠA		1	2区SK930
	ⅡA		1	
	ⅡC		1	2区③・④
	ⅢA	1	4	1区SX921、2区④・⑤
	ⅢB		2	2区③
	ⅣB		1	2区③
	ⅣC	1	1	1区④
	不明	4	2	
軒平瓦	ⅡA		5	2区④・⑥・⑦・⑧
	ⅡB		3	2区SD925・③
	ⅡC		2	2区④
	ⅢA	5	7	1区SX921、2区SD925・④
	不明		3	

※1・2区の①・②層、および型式不明軒瓦は省略。

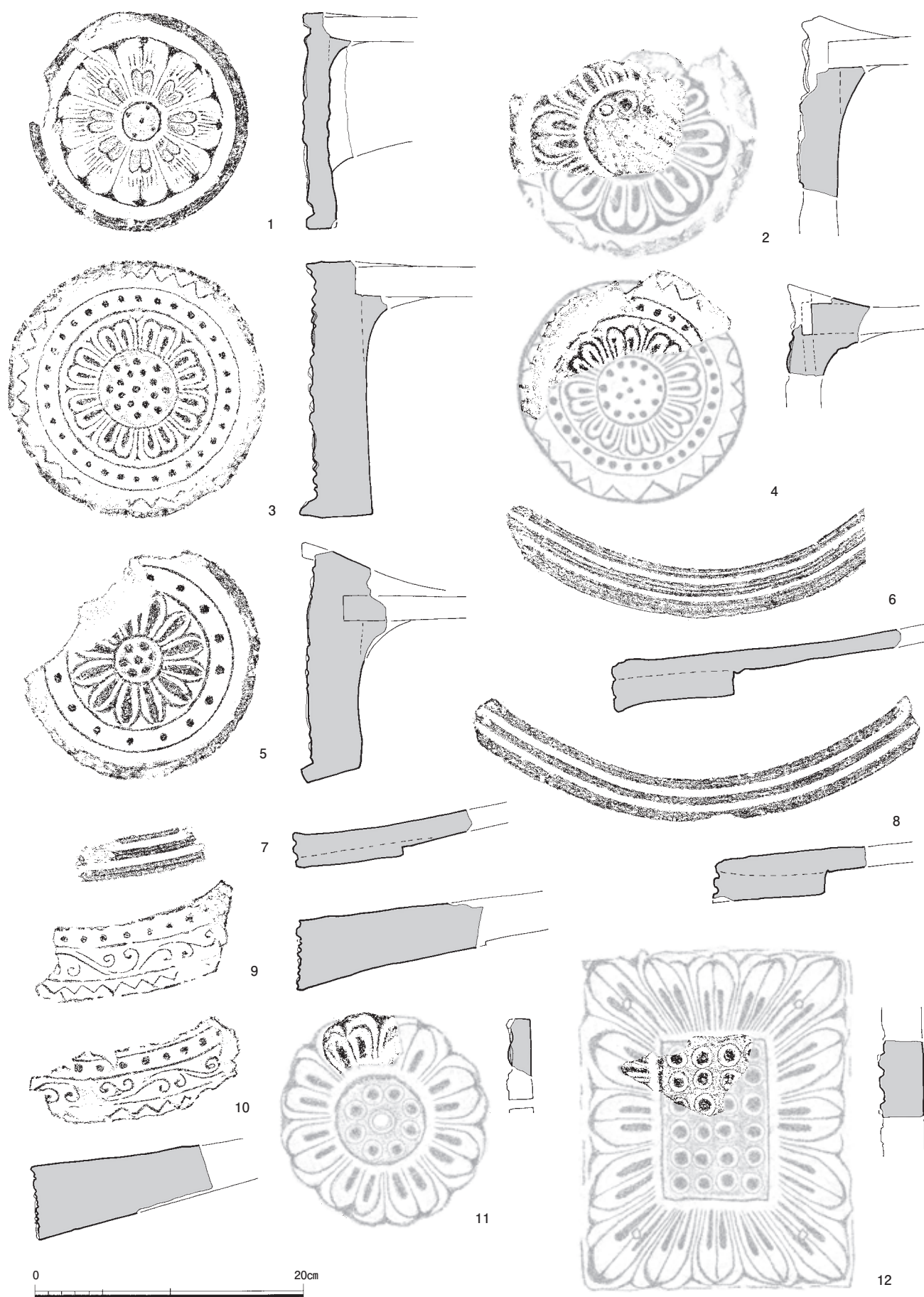


図174 第164次調査出土瓦類 1:4

部に書かれた例のほかに、軒丸瓦Ⅱ型式Cの瓦当裏面に書かれる例が確認されている（明日香村教委『明日香村遺跡調査概報 平成19年度』2010）。今回検出した「吳」字をもつ文字瓦も胎土や焼成が軒丸瓦ⅡC型式と類似しており、同時期のものと考えられる。

今回の調査では、丘陵西側斜面においては大規模な整地を数回にわたりおこなっていることを確認した。整地土からは多くの瓦が出土しているが、瓦の様相は層ごとに異なる。表18に、軒瓦の出土層位および遺構を示した。各層に含まれる軒瓦のうち、最も新しい型式をみていくと、第1区④層および第2区③層では奈良時代の軒丸瓦Ⅳ型式B・C、第2区④・⑤層では、藤原宮式の軒丸瓦Ⅲ型式A・Bと軒平瓦Ⅲ型式A、第2区⑥～⑧層では7世紀後半の軒平瓦Ⅱ型式Aが含まれる。第2区⑪層からは、軒瓦の出土はないものの、丸・平瓦は格子叩きのもののみで、7世紀前半の瓦と考えられる。なお⑪層を掘り下げた地山面で検出したSK925からは、7世紀前半の軒丸瓦Ⅰ型式Aが出土した。このように、丘陵西側斜面の整地土層からは、7世紀前半～8世紀後半の瓦の層位的な出土を確認した。（石田）

土器 第164次調査区からは整理用木箱で15箱分の土器が出土した。第1区では平安時代の土師器・黒色土器が多数出土し、他にも施釉陶器、中世の瓦器・瓦質土器・白磁・陶器、近世磁器が少量出土している。第2区では7世紀から平安時代までの土器が層位的に出土している。以下では第1区および第2区の整地土から出土した土器を中心に報告する。

第2区SK925（1～7） 須恵器杯H身は1が受け部径13.6cmで底部ロクロケズリ調整、2は受け部径15.2cmで胎土が非常に精良である。無蓋高杯（3）は三方透しである。甗（4）は注口がわずかに突出する。5は土師器杯G、6は杯Hである。高杯H（7）は裾部に段をもつ。須恵器杯Hから見て飛鳥Ⅰの山田寺下層出土の土器群と同じかそれより古い様相をもつ。

第2区⑩層（8～13） 須恵器杯H身（8・9）は受け部径11.6～11.8cm。8は受け部が非常に薄く、内面側へやや巻き込む形態である。杯H蓋の10は口径13.2cm、天井部はロクロケズリ調整である。長脚二段三方透し高杯（11・12）の11は裾部に4条の沈線を施す。13は土師器高杯Hである。杯H身から考えて飛鳥Ⅰの新しい段階に位置づ

けられる。

第2区⑦～⑨層・SX926・SD927（14～40） 第2区⑦～⑨層出土土器は接合する個体が多く器種構成も類似しているため、一括して記述する。出土土器は土師器杯H（19）・鉢（22・23）、須恵器杯A（14・15）・杯B（18・20・21）・杯B蓋（16・17）・鉢（24～25）・漆容器（27～38）がある。14・15は底部ロクロケズリ調整であり、14は朱墨の転用硯である。杯Bはいずれも回転ヘラ切り後ナデ調整を施しており、20は灯火器として使用した痕跡が確認できる。鉢は口唇部をつまみ上げ面をもつもの（24・25）と丸く収めるもの（26）がある。漆容器は平瓶（27～30）、長頸壺（31・32・34・36）、短頸壺（35・38）、徳利形壺（33）、甗（37）があり、長頸壺の出土量が最も多い。漆は器面に塊状に付着するもの（29・30・34）、薄く膜状に付着するもの（31・32・35・36）、わずかに付着するもの（27・28・33・37・38）がある。なお34は三段構成で尾張産の可能性がある。22・23は口縁部が内湾し、23は体部外面の一部にハケ調整を確認できる。この他にも土師器甕・鍋が出土した。器種構成から飛鳥Ⅳと考えられる。またSX926出土の須恵器漆壺（39）、SD927出土の土師器皿（40）も層位からこの時期と考えられる。なお40は搬入土器の可能性がある。

第2区⑥層（41～48） 41～43は須恵器杯B蓋である。笠形の器形で端部にかえりはない。44は杯Aであり、底部ロクロケズリ調整で美濃須衛窯産の可能性がある。45は杯Aで底部ロクロケズリ調整を施す。46は杯Bで底部ナデ調整を施し、高台接地面は外傾する。47は鉢Aである。48は土師器高杯Aの脚部である。器種構成から飛鳥Ⅴと考えられる。

第2区⑤層（49～55） 49は須恵器杯B蓋であり、笠形の

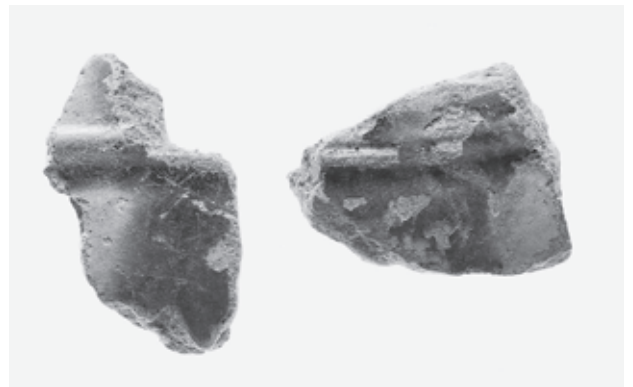


図175 第164次調査出土奈良三彩片

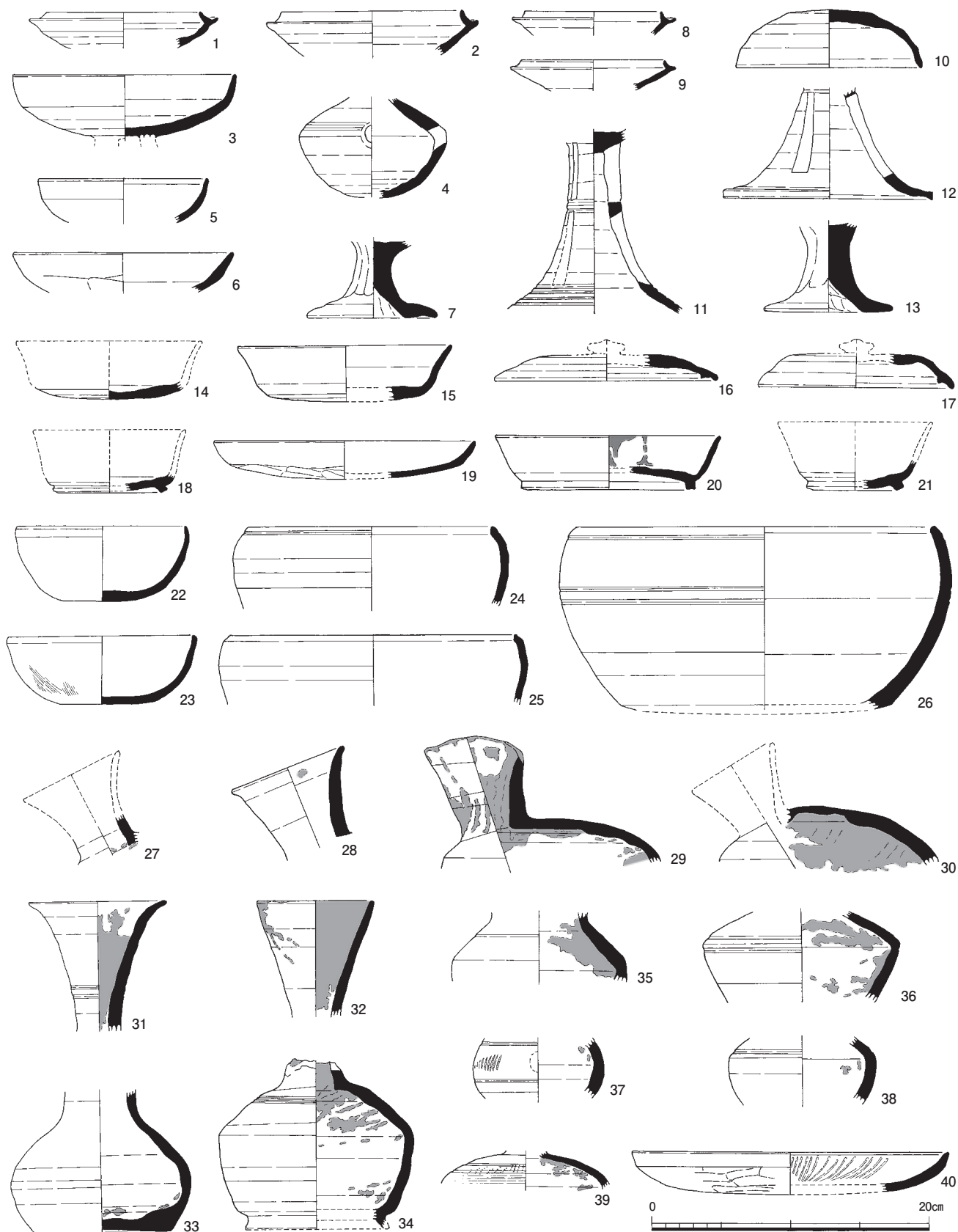


图176 第164次調査出土土器 (1) 1 : 4

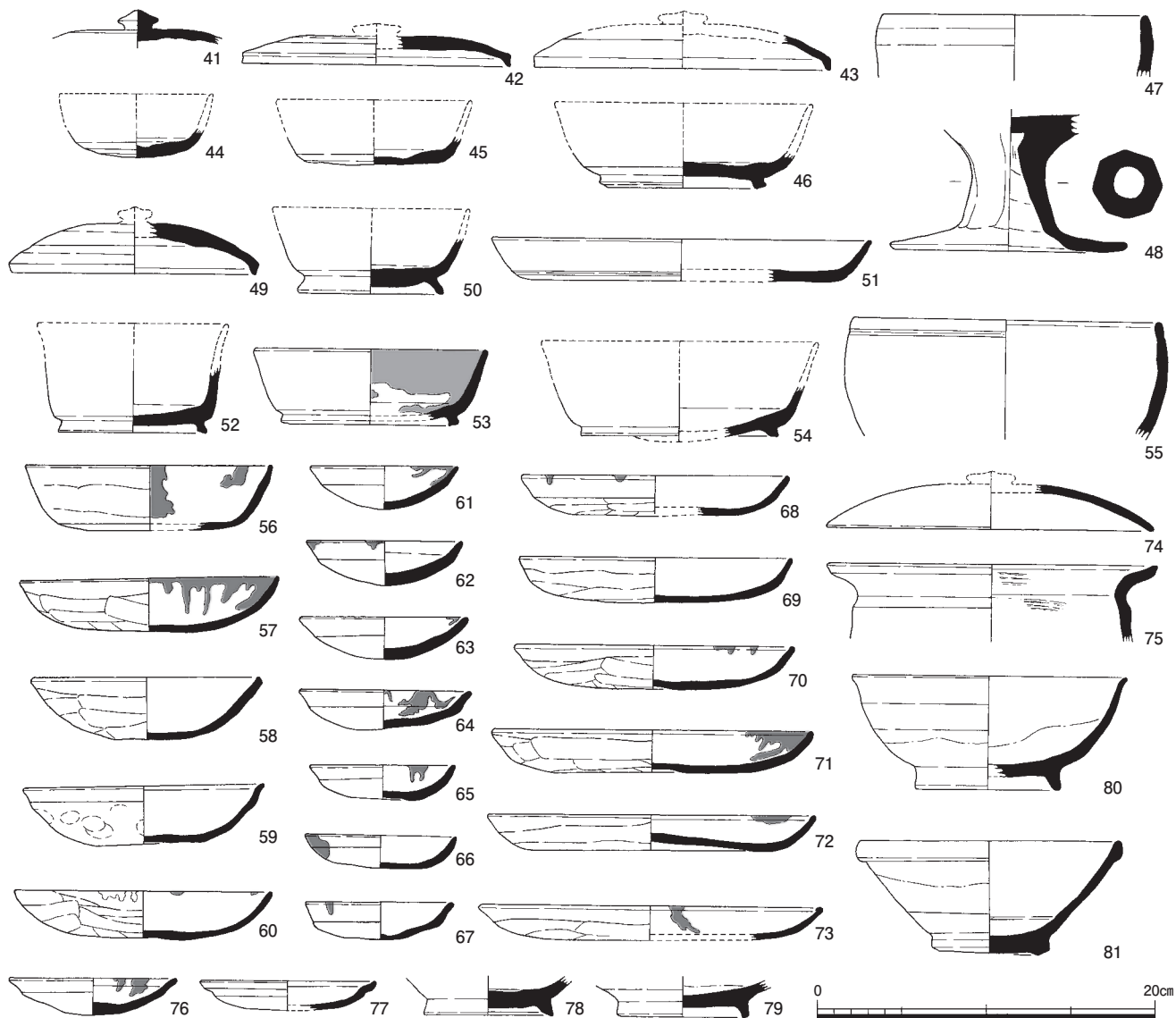


図177 第164次調査出土土器(2) 1:4

器形を呈する。50・52～54は杯Bで、底部回転ヘラ切り後ナデ調整である。51は皿Aであり、体部に1条の沈線が巡る。55は土師器鉢で口縁部に1条の沈線を施す。平城宮土器ⅠおよびⅡのものと考えられる。

第2区④層(56～75) 第2区④層は油煙や灯芯痕が付着した土師器碗・皿が多数出土した。完形品が多いことから、灯火器として使用したのちに一括して廃棄されたものと考えられる。出土土器の総個体数は杯A(56)が4点、碗A(57・58・60)が4点、碗C(61～64)が15点、碗D(59)が3点、皿A(68～73)が13点、皿C(65～67)が15点、蓋(74)が2点、甕(75)が3点である。調整は杯A・碗A・皿Aがc手法だが、風化が著しく調整が判断できない個

体も多い。碗C・碗D、皿Cはe手法である。油煙は口縁部の1・2ヵ所に付くものが多いが、中には底部中央まで及ぶもの(64)、内面全体が黒ずんでいるもの(66)が存在する。形態および外面の調整手法から、平安時代初頭の平城宮土器Ⅶに位置づけられる。

第2区③層(76～79) 76は土師器碗Cでe手法である。口唇部内面に油煙が付着し、底部内面中央には弧状の斑文が確認できる。79の灰釉陶器碗は東濃産で底部糸切り不調整である。この他に土師器甕、黒色土器A類が多数、黒色土器B類が少量出土している。10世紀前半から後半と考えられる。

第1区④層(77・78) 77は土師器皿Aで全体に薄手であ

り、口縁部を「て」の字状に屈曲させる。78の緑釉陶器碗は近江産で、高台接地面がわずかに窪み、底部内面には2重の圈線が確認できる。奈良三彩(図175)の小片は胴部に突帯を巡らせ、突帯中央に1条の沈線を施す。この他に土師器羽釜や黒色土器A類とB類が出土している。10世紀後半から11世紀前半と考えられる。

第1区③層(80・81) 80は灰釉陶器碗である。東濃産で、底部回転糸切り不調整。転用硯の可能性ある。81は白磁碗である。全体に分厚いつくりであり、玉縁の口縁部で底部は削り出し高台。底部内面に1条の沈線を施す。このほかに瓦器碗や土師器羽釜が出土している。11世紀半ばから12世紀前半と考えられる。

まとめ 今回の調査で出土した土器に関する主な成果としては、第2区において飛鳥Ⅰから平城宮土器Ⅶまでの土器群を層位的に確認できたこと、そして漆壺や鉢、灯火器などの檜隈寺の造営や活動に関連する土器が多く出土したことが挙げられる。加えて第1区出土の白磁の年代は、11世紀後半から12世紀前半と考えられる十三重石塔台石下出土の褐釉陶器四耳壺(奈良県教育委員会『重要文化財於美阿志神社石塔婆修理工事報告書』1970)と非常に近い。この他の10世紀半ばから11世紀半ばの施釉陶器を含め、古代末から中世における檜隈寺周辺の動向を知るための貴重な資料といえるだろう。(高橋 透)

鍛冶関連遺物 羽口片が第2区③・④層から、鉄滓が第1区③層および第2区④・⑥・⑨・⑩層などから計601.3g出土した。

金属製品・その他 SD925と第2区⑥層から刀子の莖状のもの、第1区③層と攪乱から鉄釘状のものが出土した。このほかに寛永通宝1点、碁石3点、石英計1,593.4gが出土した。また瓦組暗渠SX920据付土からモモの核が1点出土した。(石橋茂登)

4 まとめ

今回の調査では、檜隈寺の主要堂宇を想定できる丘陵頂部付近に調査区を設定したが、後世の削平が著しいため明確な建物遺構は検出できなかった。しかしながら、第1区では檜隈寺創建瓦を転用した瓦組暗渠SX920を検出し、第2区では大規模な整地層の下で、7世紀前半の土坑SK930を検出するなど、いくつかの遺構を確認した。さらに、丘陵の西側斜面では、7世紀前半から11世紀に

かけて大規模な整地がおこなわれており、各整地層に含まれる土器や瓦の年代が層位的にまとまっていることが確認できた。

今回の調査で確認できた整地層に含まれる土器や瓦の年代から、檜隈寺における整備の段階は、Ⅰ期：7世紀前半(第2区SK930、⑪層)、Ⅱ期：7世紀後半(第2区⑦～⑨層)、Ⅲ期：7世紀後半から8世紀前葉(第2区⑤・⑥層)、Ⅳ期：8世紀後半から9世紀初頭(第2区④層)、Ⅴ期：10世紀後半から11世紀前半(第1区SX921、第2区③層)、Ⅵ期：11世紀半ばから12世紀前半(第1区④層)の6期に分けることができる。かつて、岩本正二氏は軒瓦の年代観から、檜隈寺の変遷を5段階に大別しており、東漢氏の動向と照らしあわせて検討を加えている(岩本正二「明日香村檜隈寺の調査」『仏教芸術』136号、毎日新聞社、1981)。今回の調査成果は、岩本氏による5段階変遷とも合致する点が多く、従来から言及されてきた出土軒瓦の年代が檜隈寺整備の画期と大きく関わるのが発掘調査からも確認することができた。

今回確認した6期にわたる変遷のなかで、檜隈寺の主要伽藍造営に関わる整地はⅡ期とⅢ期のものである。Ⅰ期は第159次調査で検出した堅穴建物SB910や、檜隈寺前身伽藍との関連性が考えられる。Ⅳ期は、8世紀後半にあたり、東漢氏の同系氏族出身の坂上苺田麻呂・田村麻呂父子が活躍する時期と合致する。坂上苺田麻呂は、宝亀3年(772)の上表文で檜前に居住していた「檜前忌寸」を高市郡の郡司にする勅を得ており(『続日本紀』)、この時期に一族の氏寺として檜隈寺を再整備した可能性は十分考えられる(岩本1981)。平安時代であるⅤ期以降に関しては、当該期の瓦は極端に少なく、従来から9世紀以降檜隈寺の堂宇は衰退していったと考えられている。したがってⅤ期の整地は、あるいは寺域内に造られた於美阿志神社の発展と関わるのかもしれない。Ⅵ期に関しては、十三重石塔建設や、講堂の瓦積基壇を玉石積基壇に造り替える時期と一致する。

このように、大規模な整地の背景には、檜隈寺造営や東漢氏系氏族の動向、於美阿志神社の発展や十三重石塔造営など、檜隈寺における画期とみられていた時期と大きく関わる可能性が高い。以上のように、今回の調査では7世紀前半から12世紀にかけての檜隈寺における整備の実態に関わる重要な成果を得ることができた。(石田)